

特集

〈事例〉

駄菓子屋「狛もん」を開店 生きがい就業と多世代交流を実現

公益社団法人
狛江市シルバー人材センター

(東京都)

狛江市SCは、令和6年9月に駄菓子屋「狛もん」を開店した。センターが独自事業で駄菓子屋運営をするのは全国初という。店内には200種類以上の駄菓子が並び、60～80代の会員が2交代で店頭に立つ。70～80歳以上の会員が全体の8割以上を占めることから、高齢会員の生きがい就業の場を創出するとともに、子どもたちの居場所をつくり、多世代が集う地域交流の拠点になることを期待している。

9年連続で会員が増加 多彩な会員活動が話題

狛江市SCは、平成27年度から9年連続して会員数が増えている。特に女性会員が増えており、平成27年度は151人だったが、令和5年度は313人と2倍以上になった。

会員活動も活発で、令和6年6月にはダンスクラブ「チャミーズ」の女性会員がテレビ朝日の番組「ナニコレ珍百景」に出演した。また、会員が地元FM局（コマラジ）で毎週金曜日13時から、数分程度のセンターのCMに出演するほか、毎月第2金曜日には「プラチナパワーin狛江」という番組

枠に生出演してセンターの活動を紹介するなど、多彩な取り組みが話題となっている。

さらに令和6年度には、新たに独自事業として駄菓子屋の運営を始めた。センターが事業として駄菓子販売を行うのは全国で初めてで、子どもや高齢者など多世代が集う地域交流の場づくりとともに、生きがい就業の場となることを目指している。

駄菓子屋「狛もん」を開店

駄菓子屋は「狛もん」という店名で、令和6年9月2日に開店した。センター事務所から歩いてすぐの児童公園のはす向かいにある。店は約13㎡と小さいが、ラムネや

チョコレート、ゼリー、スナック菓子など200種類以上の商品が所狭しと並んでいる。価格は、一つ数十円のものが中心だ。

市長からの何げない提案が 駄菓子屋事業に結実

センターでは、会員の年齢が年々高くなっており、令和5年度の平均年齢は76・4歳。年齢階層別で最も多いのは80歳以上の235人で、以下、75～79歳の226人、70～74歳の203人となっており、80代と70代が全体の84・5%にもなる。特に80歳以上の会員に対する就業場所の提供が喫緊の課題になっていた。

令和5年12月、センター役員が

「狛もん」外観。すでに複数のセンターから視察の依頼を受けている



年末のあいさつで松原俊雄市長を訪問した際、センター事務所近くにある児童公園に放課後になると子どもたちが大勢集まるという話をしたところ、松原市長から「駄菓子屋を開いてみたらどうか」と何げない提案があったことが、「狛もん」開店のきっかけとなった。

センターに戻るとすぐに、役員をはじめとする関係者で事業化に向けた検討を開始し、理事会で決

定した。

年が明けて令和6年1月、年初あいさつで再び松原市長を訪ね、駄菓子屋の事業化に取り組むことを報告した。1か月もたたないうちに事業化へと動き出したことに、松原市長は驚いていたという。

開店に向けた取り組み

早期の事業化を目指し、役員全員で取り組むこととし、店舗の内装・開店準備、記念品製作の依頼と対応、内覧会の準備など作業ごとに分担して、期限を区切って準備を進めていった。

店舗は、以前から市より借用している建物を洋服のリフォームなどを行う独自事業「衣服工房ひまわり」の店舗兼作業所として使っていたが、その一部を駄菓子屋にすることにした。市役所と現状の変更について協議し、承諾を得て店舗として改装した。

また、駄菓子屋開店に際して記念品の配布も検討。池田あけみ常

務理事兼事務局長は全国女性代表者会議等に参加して、以前から各地のセンターの女性会員における縫製技術の高さに感心していた。そこで、記念品は布製のエコバッグとし、全国のセンターに製作を依頼することを提案して、理事会で了承された。

小林恵太局長代理は、「駄菓子屋には、職員全員にそれぞれ思い出があり、よく行っていた店のことやどんな菓子が好きだったかなど」とともに、仕入れる商品や内装についても意見が飛び交い、みんなわくわくした気持ちで取り組んでいました」と振り返る。にぎわいのある店にしたいという思いから、休日に都内の駄菓子店を巡り、品ぞろえや陳列の仕方などを自発的に調べた職員もいたそうだ。

店名の「狛もん」は、開店準備の過程で幾つかの案が出て、役員による投票で決定した。絵が得意な小林局長代理が店のキャラクターも作成した。「みんなから愛着

を持つてもらえるようなデザインにしたそうだ。また、店舗内は、子どもが見やすいように商品を陳列することと清潔感を大事にしたという。

全国のセンターに記念品のエコバッグ製作を協力要請

5月には、開店記念のエコバッグ製作について、公益財団法人東



「狛もん」看板の前で。池田あけみ事務局長（写真右）、小林恵太局長代理（写真中央）、小林局長代理が作成した「狛もん」のキャラクター

京しごと財団（東京都シルバー人材センター連合）を通じて、公益社団法人全国シルバー人材センター事業協会から各道府県のシルバー人材センター連合に周知してもらった。当初は、1センターに50枚依頼するとして、1000枚を予定していた。応じてくれるセンターがなかったらどうしようという不安もあったが、いざ始まるとう電話が鳴り続けるほど反響があり、1週間で予定枚数を越えたため、急ぎよ3000枚に増やした。結果的に104センターから問い合わせがあり、53センターに発注することにした。

エコバッグはサイズ、袋詰めする際の畳み方を統一して、製作を依頼。また、配布するエコバッグに添えるため、製作したセンターには、センター紹介や地域自慢、どのような会員が作ったのかなど、自由にメッセージを書いてもらった。「作った人のことが分かる」と、バッグをより大事に使ってもらえ

ると思いました」（池田事務局長）。

一方、配布したエコバッグには空白のカードを同封し、受け取った人から製作したセンターに向けて一言メッセージを書いてもらい、各センターへ渡すことにした。

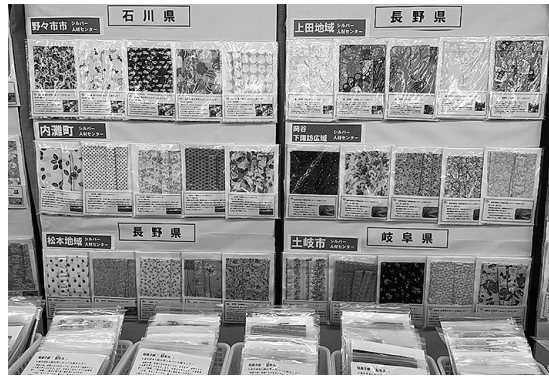
関係者への内覧会を経て正式に開店

8月29日には、松原市長をはじめ、開店に向けて協力を仰いだ関係者を招いて内覧会を開いた。「猫もん」の見学だけでなく、センター会議室に設けた「エコバッグ展示会場」に、能登半島地震で被害を受けた内灘町SCをはじめ全国53センターの会員が製作した色とりどりのエコバッグを壁一面に展示して、会員の高い縫製技術と組織活動の魅力を来場者に伝えた。そして、9月2日に「猫もん」が正式に開店した。

子どもたちの社会勉強の場に

「猫もん」の営業時間は、月々

内覧会でのエコバッグ展示会場。手作りエコバッグは、1点ずつセンターからのメッセージと一緒に袋詰めしている。「猫もん」開店のチラシを持参した人に配布した



金曜日の12時30分～16時30分（土・祝日は休み）。12時～14時30分と14時30分～17時の2交代制で、2人が店に出て、レジや品出し、整理整頓を行う。就業会員は15人（令和6年9月時点）で、80代が5人、70代が9人、60代が1人である。レジは、会員がスキヤナーで商品バーコードを読み取ると合

200種類以上の駄菓子が並ぶ店内



計金額が表示され、買い物客が精算機に現金を入れるセミセルフレジを導入。操作を習得するため、開店前には就業会員向けの研修を行った。

早い時間帯には親子連れが目立ち、小学校が終わると児童でにぎわう。孫や自分のために購入する目的で店を訪れる高齢者もいる。



駄菓子屋「狛もん」の就業会員の皆さん。前列左から江口玲子さん、佐久間のリ子さん。後列左から田中映子さん、篠田治江さん、清藤峰子さん、反後征子さん、望月季子さん、杉田三枝子さん、松本茂男さん

就業会員からは「まだ慣れなくて」という声もあるが、「とても楽しい」「健康にも、ぼけ防止にも良さそう」「子どもたちが楽しそうに來てくれるのがうれしい」などの声が聞かれた。

池田事務局長は、就業会員について、「地域住民や子どもとの関わりに生きがいを感じているようで、

『このような事業が始まってありがたい』と言ってくれています。そうした会員の声や元気な姿に、職員はエネルギーをもらっています」と笑顔を見せる。

また、「予算を超えないようにどれを買うか子どもが真剣に選んでいる姿は、見ていてほほ笑ましいものがあり、暗算ができた子を会員が褒めることもあります。このようなコミュニケーションは、子どもにとっても貴重な社会勉強の場になっています。セルフレジの店が増える中、祖父母世代の会員と子どもたちが会話を交わすことができるので、地域にとっても貴重な場といえます」と開店後の感想を語る。

職員の関わり方と「狛もん」への期待

企画から開店までの工程は役員で相談しながら決定し、全職員が協力して店づくりを推進した。センターでは、今後の運営には会員

にも関わってもらい、盛り立ててくれることに期待を寄せる。

池田事務局長は、「会員の高齢化が進む現在、会員に対するフォローなど、職員の関わり方も変えていかなければいけないと感じています」と言う。そうした思いもある中で進めてきた駄菓子屋事業は、「職員が通常業務をこなしながら、生き生きと取り組んでくれた結果、立ち上げることができました」と語る。

エコバッグ製作を各地のセンターに依頼したことで、多くのセンターから、「会員が楽しそうにバッグを作っていた」「いい就業機会になり、感謝している」などの感想が届いた。そうした反応にも役員は喜びを感じ、開店準備により力が入ったという。

池田事務局長は、「シルバー人材センターには組織力がありません。一人ではできないこと、一センターでは難しいことでも協力することでできると今回の経験を通して

実感しました。『狛もん』に來てくれる子どもたちが、大人になってもここを覚えていてくれたらうれしいですし、次の世代に引き継がれていくことが、私たちの夢であり、希望です」と締めくくった。
(増山美智子)

事業運営状況 (令和元年度～令和5年度)

年度	会員数			粗入会率 %	就業実人員 (延人員) 人 (人日)	就業率 %	受注件数 件	契約金額 千円	公民比 %
	男性	女性	全体						
令和元	412	234	646	2.7	558 (55,661)	86.4	2,191	202,807	24.6/75.4
2	420	248	668	2.7	526 (53,606)	78.7	1,918	197,137	29.3/70.7
3	436	275	711	2.9	556 (56,624)	78.2	2,065	206,941	29.7/70.3
4	455	285	740	3.0	568 (58,687)	76.8	2,107	220,843	29.5/70.5
5	473	313	786	3.2	615 (59,291)	78.2	1,966	227,709	28.7/71.3

※受注件数、就業実人員、契約金額は請負・委任と労働者派遣事業を合計した数値
 ※就業実人員は請負・委任と労働者派遣事業が対象 ※就業実人員は令和2年度から労働者派遣事業の教育訓練受講を含む
 ※令和5年度以降は性別未回答の会員がいるため、会員数の男女計と全体は必ずしも一致しない